ヒマラヤ高所村落における疫学的研究
－人文班研究概要－

河合明宣
京都大学農学部

京都大学ヒマラヤ医学学術研究計画は医学を中心とした野外調査主体の研究プロジェクトであるが、その大きな特徴はヒマラヤという「地域」研究のなかに医学研究を組み込んだ、疫学を指向していることである。とりわけネパール側のヒマラヤ高所の村ナムチェ・バザールを長期に渡って定点フィールドとすることで、その他のヒマラヤ地域、カラコルムさらにはアンデスなど高所での研究を展開する際の指標となるデータを蓄積していくことをめざしている。ここにわれわれ人文班が医学学術研究という大きなテーマの一端をになう意味があるといえるだろう。ある社会の構造とその住民の世界観を理解することで、はじめて健康であるとか病気であるとかということの意味も明かにされるからである。この２年間の成果では医学班と人文班との間の連携はかならずしも成功しているとは言えないが、それほど性急に先を急ぐ必要はない。フィールドワークは実験と異なり、それ自体が社会の文脈に埋め込まれているからだ。基礎的なデータを蓄積し共通のタームを得る努力を続けることからその成果は生まれはじめている。以下では人文班の調査の内容を概観し、今後の課題ついて述べる。

1　はじめに

当ヒマラヤ医学学術研究計画の目指したフィールドワークの基本的性格は次の点にある。フィールド調査の主要な目的は、ヒマラヤ超高所を極低酸素状態の巨大な実験室にみたて，医者を中心とした調査者がその中に入り込み、自らを被験者として人体の適応のメカニズムを解明するというところに置かれた。それは超高所実験室での成果は、大学や研究機関の低圧室における実験・観察結果とは根本的に異なるものであるという確信に裏打ちされている。すなわちそれは超高所実験室での調査データーを低地の、主として都市に住む人々を対象とする現代医学が当面する諸課題の解決に何らかの形で結び付けることが可能であるという、学としての医学の知的関心をかきたてる知のフロンティアへの旅立ちともいえたかもしれない。そのための媒介項として、高所住民を対象とした疫学的調査が極低酸素・超高所での実験結果を解読するために必要不可欠であると考えた。

高所医学・高所生理学と疫学的調査との関連の要はこの点にあった。（イ）チベット人またはシェルパというエスニシティと、（ロ）高所に定住する人々という二項目を固定した疫学的調査が媒介となって高所医学・高所生理学のフーィルドである超高所ヒマラヤと日常生活の空間を連続的に繋ぐことが可能であると考えた。この点に無人の超高所を知的活動のフィールドに変えてしまう医学に対して人文班はある種の羨望を抱いたが同時に医学が対象とする学問的領域に共通な関心の存在を確信した。そうであればこの調査隊の一部として編成された人文班は充分に人文科学の領域での活動を確保しえるのである。

疫学的研究は、地理的空間の規定をその成立の根拠の一つに想定するので医学のこの知的探検の

目的に合わせて人文班はチベット人が住むヒマラヤ地域をフィールドとした。

2　行動概要と成果

（1）人文班が参加した第二次隊は、1989年の8月から9月の初めにかけてサガルマタ県ソル・クンブ郡のナムチェ・バザール村において高所住民を対象とした疫学的調査を行った［松林：1990］。超高所における人体の適応のメカニズムの解明が再現可能な低圧実験室での測定と異なるとすれば、以上で述べた如く、その違いをもたらす要因の検出は不可欠である。高所に定住する人々の様態を知り、高所適応の度合を医学的に検出する必要があった。

調査村に開設した診療所を訪れたナムチェ住民に対して医師が健康診断を行い、アドヴァイス与えている間に、人文班は全世帯の基礎的データーを収集した［河合、古川、月原：1990］。またその統計データーと照応するように世帯別に家屋を記入した集落図を作成した。さらに世帯をグループ化する際に最も基本的であると考えられる家系の聞き取りを開始したが、全世帯を調べるには時間不足となった。しかし短期の調査にもかかわらず全世帯をセンサス調査で把握したことは医師の診療所での受診記録を集落の社会的、経済的諸要因と関連させて考察する基礎資料となった。

（2）月原は、ヒマラヤ住民の生業を考察する際に極めて重要であるヤクを中心とした牧畜と農耕との複合のあり方が観光基地化するナムチェでいかなる特色を持つに至ったかを調査した。ナムチェは、ヒマラヤ南面のインドとチベットとの交易の基地として永く「チベット世界」の広がりの中に置かれていた。周辺の集落に比較すると村経済において交易の比重が大きかったという点でいわば例外的ともいえるナムチェでの農牧複合によって成り立つ生業の特色を把握することを通してこそ、逆にチベット世界の広域的な経済社会の特色を理解する糸口となると主張した［月原：1990］。

（3）古川は、年に一度催される集落の重要な行事であるドゥムジ祭について聞き取りを行い、歴代の頭屋（ラワ）の名前を記録した集落の覚えを写し取った。祭祠をとり行うために毎年選ばれる８人のラワの資格及び順番の考察を通して集落の構造を理解しようとした。シェルパは内婚的単位としての親族集団ルーに属しているがラワの順番とルーとの関係を調べることで当該集落の草分けを明らかにし、集落形成史に迫る糸口を得た。同時に古川は、近年観光化の波に洗われ、生活様式の変容が進む中で燃料用の薪を得るために森林の伐採が急速に進んでおり、政府が国立自然公園として集落周辺の放牧地を植林地区として囲い込んでしまったことに注目した。外からの影響によって豊かに存在した森林が急速に失われることの意味をそこで生活する人々の目を通して明らかにしようとした。こうした状況下での集落住民の生活観、環境観の変化は食事や居住形態の都市化とあいまって生活の充足度の質と量を規定すると思われる。この問題の追求は生活様式の変化を生活の充足度という点まで含めてより包括的に把握しうる視角となるであろう［古川：1990］。

（4）1990年の第三次医学学術調査における人文班は松林をリーダーとする疫学調査隊内に編成された。中国シシャパンマ地域での高所医学調査研究の終了後約一週間チベットの定日県熱求村（ティンリー県ラチュー村）において医師による診療所形式の健康診断の間に集落の人口、家畜の種類、頭数及び耕地の景観等を調べた。概況調査に留まったとはいえ、世帯の大半は一妻多夫を経験していた等の観察はフィールド調査が極めて困難な今日のチベットの状況下では極めて貴重なものであった。

（5）同班は、ザンムー経由陸路でネパールに入国し、カトマンドゥから再びナムチェ・バザールに入った。疫学調査隊は1989年の第二次医学学術調査のメンバーとほぼ同じ構成であった。人文班は昨年度に引続き特に外婚的親族集団ルーの調査、観光業の浸透による村経済及び生活様式の変容、政府の環境保護政策と集落住民の対応を観察した。

集落の構造を見る上で重要なドゥムジ祭儀におけるラワの機能及びラワの持ち番になった世帯に対していかなる支援のグループが形成されるか等の観察・調査を行った。1990年に参加した河合は総隊長一行のメンバーとしてカトマンドゥ経由で帰国し、ナムチェ集落調査には参加しなかった。新たに加わった米本は自然公園の成立事情等環境保護行政の展開を調査し資料収集を行った。米本の調査によって、先進諸国による地球環境保護運動の動きが援助という形を通してヒマラヤ高地の集落にいかなる影響をえたかという点が明らかにされよう。これは同時に古川の主要な関心である住民の環境認識を規定する要因の析出につながるものである。

月原は6月29日より7月6日までの間に行われたドゥムジ祭でのドゥムジを通じて見られる村人間の互酬的やりとりを観察し、併せてビィデオ撮影も行った。またクンブのシェルパの集落としてはナムチェより古いディンボチェ集落のエコロジカルな立地条件、家畜飼育状況等を調べた。ナムチェ集落と関係があるディンボチェのこの予備的調査は、ナムチェ集落の形成史を理解することと集落を越えたレベルでの社会集団を把握する作業の前提となるものである。

（6）月原は、ナムチェ調査後インドに出て一ヵ月余りチベット世界の西端とされるラダックで調査を行った。ラダックにおいて集落の立地条件と農牧複合のあり方を検討した。この観点から特にレー谷の灌漑システムについて調査した。現在は、谷間の盆地において灌漑によって成立する農耕地帯が核となり周囲の山地高原での牧畜をその圏内に取り込み、一つの地域を形成するという「河谷ユニット」という概念を案出し、それをチベット世界の全体像を把握する作業の一環に位置づけようとした。

現時点では中間的な報告にならざるを得ないが、要約すれば、人文班の調査は以下の四点をこれから継続していく調査研究の焦点にすることを明らかにしえたといえる。（ア）ナムチェ村を構成する住民を親族集団に分け、この観点から村落の構造を把握する予備的調査を終了したこと。（イ）村落の経済は農牧複合を基礎にした小農経営とトレッキングのガイド、登山用具・食糧の輸送、観光客を相手にしたロッジ・食堂経営、土産物販売及び出稼ぎ送金より成り立っておりこのような村経済の大要と各世帯毎の生業及び生活面の概要を把握したこと。（ウ）1970年代以降の観光基地化の進展にともう生活環境の変化、特に森林荒廃の急速な進行が住民の生活観を変えつつある。伝統的生業に基づく生活様式が強力な外部要因によって変容を被った地域に暮らす人々が抱く環境観を探ることで、先進諸国による地球環境保護のための援助の具体的指針を見通し得る。このためにナムチェは問題がシャープな形で出ており、格好の対象であるとの確信を得えたこと。（エ）チベットをまとまりを持った一つの世界として把握するために広域的な観察を行い、クンブ地方における集落調査をその作業の一環に位置づけること。今後続いていく調査の主要な課題と研究の論点を以上のように設定しえた。

3　今後の課題

当面の課題は、人文・社会科学と医学の各分野との学際的な村落研究のテーマをどう設定し、まとめていくかである。1991年に行う第四次医学学術調査では、（1）親族集団という単位と疾病の広がりとの関係、（2）生活様式、とりわけ食生活の変化と疾病との関連性という点で医学の分野との共同研究の態勢を整えていく。

1）親族集団という単位と疾病の広がりとの関係

ナムチェ集落における全世帯の健康状態の調査を行い、その結果を親族集団の単位で整理する。これはさらに次のような比較調査への展望を持つ。鹿野は、クンブ地方とならんでシェルパの分布する地域中で最も標高の高い地方であるロールワリン地方のモノグラフにおいてクンブ地方のシェルパとの相違点を以下のように要約している。「ロールワリンの経済は、クンブに比べ、全体として自給的な性格が強く、かつ世帯各々の経済的基盤

は等質的で、格差も少ない。又、ロールワリンの社会においては、世帯はより核家族的であり、世帯間の対等性は、経済的な等質性を背景として、より徹底している。村は、構成単位としての世帯の対等性と負担の平等という原理のもとに、より求心的で強固な統合組織として機能している」［鹿野　1979:33］。これに比して、クンブでは経済的基盤が多様でまた格差も大きく世帯構成も変化に富んでいる。そのために「少数の有力者の影響力が強まるとともに、村の統合的な機能は弱体化している」点を明かにしている。あるレベルでの社会集団の形成は生業の自然立地条件に規定され、かかる山地においては河川の流域がユニットとなると考えられる。ロールワリン・シェルパはクンブから比較的近年派生したグループであるが、「社会と経済の特質は、高地シェルパの経済と社会の原型を示唆している」［鹿野　1979：36］とされる。このように系譜の上でその関連が辿れる小河谷レベルでの広がりにおける二社会集団の比較検討が鹿野の研究に依拠しつつ可能となろう。

2）生活様式、とりわけ食生活の変化と疾病との関連性

1950年の開国に始まり1960年代になると外国人観光客、登山客が増え始めた。観光業が主たる経済活動となり、ロッジや食堂・商店の経営、ガイドや輸送等の賃労働による現金収入が増加した。1961年に着手される地方行政機構の改革にともない公務員が配置され、公共的施設が造られ、公的事業が導入されてきた。生活水準の向上は、茶、砂糖、米、小麦、粉等の従来ぜいたく品とされていた品物の重要性を著しく増加させた。鹿野［1989:100-103］は、1987年のナムチェ・バザールでの調査と1970年代前半に行った調査とを比較して、前の調査で見られなかった加工食品（小麦粉、茶、コーヒー、砂糖等）や卵、ケロシンといった主に外国人旅行者に需要される品目が著しく増加したと報告している。また鹿野はサガルマタ県において調査した他の６つの定期市と比較べてナムチェではこれらの品目の比重が非常に高いことを指摘した。これは観光基地化の進展によって外国人旅行者の需要を反映するとともにシェルパ自身の食生活の変化を示すものであるとしている。柳本［1971：224-232］は、1969年にクンブ地方で行った調査でシェルパの食事はバター茶、ツァンパ、ジャガイモ等が中心で貧しい印象を持ったと報告した。1970年代後半から80年代における村経済の変化とそれにともなう食生活の変化は顕著なものがあった。ヒマラヤ山地の交通の不便な集落が観光化の荒波の中で外国人旅行客によってもたらされる現金の流入によって急速な「都市化」現象が見られた。「都市化」と健康状態、疾病との関連を明らかにし得る［Andrews 1983, Pawson 1984 (a),(b)、緒方編　1989］。

3）今後の展望

以下は地域研究としてのナムチェ集落研究の展望を幾つかつけ加えたい。

（1）ヒマラヤ世界の把握

ヤクを中心とした牧畜と農耕との複合的な生業様式に基づく社会が成立しうるエコロジカルな条件の確定。月原の「河谷ユニット」仮説の検証。

（2）環境問題と援助

一国、一地方という枠組みを越えた地球環境破壊という新たなグローバルな問題は地方行政制度と農村開発、地域住民の基本的ニーズの確保という具体的問題を通して援助問題とも関連する［門田　1990］。山地ヒマラヤの集落にとって重要な生活基盤であった森林の破壊は、農村開発や基本的ニーズの充足と同時に環境問題をも同時に課題とせざるを得ない。発展途上国における農村開発、地域社会の形成と住民の環境観の問題は援助と内発的発展という枠組みの議論を深かめるであろう。ネパールはアジア諸国の中では日本との友好関係が様々な形の努力によって早くから築きあげられてきている［岩村　1965、隅谷　1990］。途展途上国援助におけ保健医療の比重は高くなっていくであろう。ネパール政府が地方行政を通じて地域レベルでの基本的ニーズの充足を計ろうとすれば、集落を対象とした農村での保健医療を主要な課題の一つとして設定せざるを得ない。保健センター等の一次医療施設の拡充［上原、我妻　1990］に

むけての基礎調査研究が必要となろう。集落を基礎にした特定の社会集団の広がりをカバーする研究はその方向での貢献を期待しうる［河合、安藤 1990］。

文献

Andrews,Clinton,1983: Photographs and Notes on Tourism and Deforestation in the Solu Khumbu, Nepal.

古川彰 1990. 「ヒマラヤ高地住民の環境認識研究ノート」『ヒマラヤ学誌』1.

岩村昇、岩村史子. 1965. 『山の上にある病院ーネパールに使いしてー』新教出版社.

門田毅 1990. 「ネパール中間山地における森林荒廃問題と農牧林生産複合1-1」『林業経済』506.

鹿野勝彦 1979. 「ロールワリン・シェルパの経済と社会」『リトルワールド研究報告』3.

—— 1989. 「ネパール東部山地の定期市（1）『金沢大学文学部論集 行動科学篇』9, 別冊.

河合明宣、古川彰、月原敏博 1990. 「ヒマラヤ高地村落研究の方法ー第一次予備調査基本データー」『ヒマラヤ学誌』1.

河合明宣、安藤和雄 1990. 「ベンガルデルタの村落形成についての覚え書」『東南アジア研究』28(3).

松林公蔵. 1990 「ネパール・クンブ医学学術調査隊行動概要」『ヒマラヤ学誌』1.

緒方道彦編. 1989 『ネパールにおける高血圧発症要因の比較疫学的研究』九州大学健康科学センター.

Pawson, Ivan G.,et.al., 1984(a),. Effect of Modernization on the Khunbu Region of Nepal Changes in Population Structure, 1970-1982,Mountain Research and Development,4(1).

—— ,et.al.,1984(b). Growth of Tourism in Nepal's Everest Region:Impact on the Physical Environment and Structure of Human Settlement, Mountain Research and Development,4(3).

隅谷三喜男 1990. 『アジアの叫び声に応えて』新教出版社.

月原敏博 1990. 「観光・交易の村における農耕と牧畜ーナムチェ村研究ノートからー」『ヒマラヤ学誌』1.

上原鳴夫、我妻尭 1990. 「途上国における病院医療」『国際協力研究』6(2).

柳本治美 1971. 「シェルパ族の食事」『季刊人類学』2(4).